



令和 7 年 12 月 吉日

報道各社 御中

自治医科大学

磁気刺激治療で摂食障害における過食・嘔吐の改善を目指す

概要

自治医科大学附属病院精神科は、世界で初めて、自己誘発嘔吐を伴う摂食障害を対象に脳への新しい磁気刺激法「間欠的シータバースト刺激(iTBS)」の効果と安全性を調べる特定臨床研究(研究課題名:自己誘発嘔吐を伴う摂食障害に対する前頭前野への間欠的シータバースト刺激の有効性・安全性を評価する無作為化、二重盲検、偽刺激対照、単施設試験)を開始しました。研究は同院で実施され、すでに1例目を終えています。摂食障害は若年女性を中心に深刻な問題となっており、従来の心理療法や薬物療法では十分な効果が得られない場合も少なくありません。iTBSは短時間(約3分)で脳を刺激できる方法で、衝動的な過食や嘔吐の改善が期待されています。さらに、遠方から参加する方に向けては病院近隣の教職員住宅を利用できる体制を整え、安心して研究に参加できるよう環境を整備しました。

詳細

摂食障害の中には、過食や自己誘発嘔吐を繰り返すケースがあり、時に命に関わる深刻な病気です。日本でも患者数は増加傾向にあり、若年女性を中心に社会的な影響が広がっています。心理療法や薬物療法などの標準治療はありますが、症状が長期化したり再発を繰り返したりする例も少なくなく、新しい治療法の開発が急務とされています。

今回始まった研究では、頭部の「背内側前頭前野」という領域に短時間の磁気刺激(iTBS)を行い、脳の衝動コントロール機能を高めることで過食や嘔吐の症状改善をめざします。iTBSはすでにうつ病治療において安全性と有効性が確認されており、そ

の治療時間はわずか約3分と短く、患者の負担を軽減できることが特徴です。本研究では、このiTBSを1日1回、週5日、4週間かけて実施します。

本研究(研究課題名:自己誘発嘔吐を伴う摂食障害に対する前頭前野への間欠的シータバースト刺激の有効性・安全性を評価する無作為化、二重盲検、偽刺激対照、単施設試験)は、無作為化・二重盲検・偽刺激対照という厳格なデザインで行われています。具体的には、患者さんを実際に磁気刺激を与える実刺激群と、実刺激に模倣した刺激のみ与える偽刺激群に1対1へとランダムに振り分け、実刺激群のほうがより高い効果をあげることを証明しようとする手法です。この手法により、科学的に信頼性の高いデータを得ることを目的としています。さらに、磁気刺激前後で、脳機能MRI検査や認知機能検査、各種症状を点数化する評価尺度を実施することで、磁気刺激治療に反応しやすい特徴を抽出し、将来的な摂食症の個別化治療を目指します。すでに最初の患者さんへの治療を終え、現在も進行しています。なお、遠方からの参加希望者には自治医科大学の教職員住宅を活用いただける体制を整えており、全国からの参加を可能にしました(1泊あたり1500円/人)。患者さんの募集期間は、2027年3月31日までとなっています。

本研究は自治医科大学臨床研究審査委員会の承認を受け、厚生労働省に届け出たうえで実施しています。今後は摂食障害の新しい治療法として確立することを目指すとともに、「やめたくてもやめられない」行動に苦しむ他の疾患、例えば依存症などへの応用も期待されます。

【連絡先】

自治医科大学 精神医学講座

〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL : 0285-58-7364